

知恵おくれの子どもたち

—この一年をふり返って—



鍋 嶋 美 春

—

私は以前中学校で精神薄弱児学級の担任をしたことがあります
が、その後肢体不自由教育に入り、昨年四月より養護学校で小学
部二年生の担任として再び精神薄弱児との生活をはじめることにな
りました。七、八年前とは子どもたちも周囲の状況もすっかり
変わって新卒のころのように私には何もかも新しく見えました。
失敗も多く、永年この道にいらっしやる先生方には当り前のよう
な子どもたちの動作の一つ一つがとてもうれしかったり、悩みの
種になったりでした。

はじめから学級経営として打ち出せるようなものはなく、当分
は子どもたちに主導権を渡し、私は楽しい環境作りをしよう、そ
の子らしさを充分に発揮できるようにと心掛けました。

まだ浅い経験ですが反省の意味も含めてこの一年をふり返って
みたいと思います。

二

連絡帳について

この学校ではものを言える子どもが少ないので、学校と家庭、
実際にはお母さんと学級担任が連絡帳を通してそれぞれの場で

子どもの状態を報告しあったり意見の交換をしています。

この連絡帳に日課とともに時々子どもたちの生活のこまをできるだけ詳しく記録しました。お母さん方にも子どもたちの小さな動きに興味をもっていただき、その子どもなりの小さな進歩を共々喜びたいと思つたからです。

お母さん文庫

九月からはお母さん方に読んでいただきたい本を集めお母さん文庫を作りました。おもなものをあげてみますと、田村先生、昇地先生、糸賀先生、池田先生の著書、神谷美恵子先生「生きがいについて」、人間をみつめて、パール・バック著「母よ嘆く勿れ」、精薄児の治療教育シリーズ」などです。中でも「母よ嘆く勿れ」はほとんどのお母さんが身につまされ、一息に読まれたそうです。効果は目に見えませんがこうした立派な先生方の言葉はそれなりにお母さん方の心に何かを刻みつけたものと思えます。

学級懇談会

月一回学級での懇談会を学校行事とは別にもちたいとお母さん方のご希望で、学級懇談会を四月から毎月もってまいりました。学校行事と異なり、放課後十人の子どもが飛び交う中での懇談ですから、落ちついた話のできないことも多くありました。で

もみんなで子どもたちのお守をしながらお茶とお菓子で世間話をするのも、なかなかよいふん囲気でした。連絡帳には「障害児をもちながらこんなにも楽しく過ごせて、過ぎていくのがもったいないような日々です」といった感想がありました。楽しいだけでも充分意義があると思うのですが、読書の感想や、子どもたちの将来のことなどが話題になり、先日は施設の見学をする計画にまで発展しました。

こうした会を重ねることによってお母さん同志の交流、また私も仲間に入れていただいております。成長していきたいと思えます。

三

学級について

二年生は能力別編成ですので、学級内での能力差はあまりありません。だいたいの傾向として理解力は一、二歳。運動能力は二歳から五、六歳、言語能力は特におくれて一歳前後でしょうか。遊べない子どもたち

四月当初学級の中ではやんちゃなK君とその相手役のEちゃん、運動神経の特に発達したIちゃんなどがよく遊びました。ほかはおごにお気に入りのお石を打ちつけて遊ぶH君、机の前にすわ

ったままのMちゃん、Tちゃんなど全体に動きの少ない子どもたちでした。その中であってK君だけが活発で、乱暴でもありません。もたちから恐れられていました。K君の移動に伴ってほかの子どもたちも安全な所へ動いていたのです。

音楽にのって

とてもうれしかったことは子どもたちが非常に音楽の好きなことでした。朝、私の顔さえ見れば「コード、コード（レコード）」とせがむUちゃん、汽車ポッポの曲がなり出すとさつと席を立てて走り出すMちゃん。四月、五月は毎日レコードをかけては跳んだりはねたり、好きな童謡を転動早々の学校で思い切り歌いました。こうして音楽にのって戯れているうちに子どもたちも活発になり子ども同志の関係もできてきたように思えます。

K君のこと

毎朝敵をむかえるような気持ちでKの目覚めを待ち、スクールバスに乗せて今日一日ほかの家のお子さんにひどい危害を与えないようにと祈る思いで見送り……午後心準備を固めつつ迎えにいきます。Kがスクールバスから降りると寝るまで気がぬけません（連絡帳より）とお母さんに言わしめるのはK君、まさにやんちゃでは天下一品です。はじめのころ私はK君で手痛い失敗をくり返しました。今でも油断をすると何かやられてしまいま

す。ほかの子どもにも危害を加えない範囲でK君の自由意志を尊重するようにとめました。が実際には集団生活ですからK君にはずいぶん禁止が多かったと思います。近ごろは音楽にのって友だちと飛び回ったり、一つのおもちゃ箱の周りにK君も含めて五、六人集まっている姿を見てほっとすると同時にかわいそうにも思っています。

四

進歩の尺度

この子どもたち一人一人の進歩を普通の子どもの尺度で測ろうとするといつも同じ所で止っているようですが、よく見るとそれなりに進歩しているもので、そのためには物さしの目をぐっと細かくする必要がありそうです。一例としてS君の経過を追ってみましょう。S君は入学の折、精神科の先生から学校生活をおくるには相当の困難があるとの注意がありました。なるほど片時もじっとしてはいないし、いつも友だちから離れて廊下や建物のはしの方を一人で歩いています。家庭でも学校でもよく脱出してしまします。

三学期のはじめS君は一人で着がえをすませていました。この学校では月曜日から金曜日までは学校でトレパン・トレシャツに

着かえます。四、五日ごろのS君はそんなことには全く無関心でした。一学期中ばかり時々自分でぬぐようになり二学期は寒くなくてもよくシャツとパンツのまま廊下を走りまわっていました。三学期になってやっとぬいで着ることができるようになったのです。(まだ前後、裏表はわかりません)ところが土曜日はシャツとパンツでうろろろしています。ぬいだものの着るものがなくて困っているようです。服を着せてもすぐにぬいでしまいます。結局十二時の下校まで数回くり返しました。こんな時、言葉の通じない不便さを感じます。

このS君が学級のAちゃんに関心をもちはじめました。"Aちゃん、Aちゃん"とうわ言のようにつぶやき、その声につられてAちゃんが近づくと、戸を開けて背中を廊下にむかって押す。Aちゃんはそのまま外へ、そこで戸を閉める。といった調子です。何ヵ月かたつとAちゃんに抱きついたり、かみついたりするようになり、二学期に入ると身の周りの世話をしようとする気持ちをを見せてくれました。手足の動きのおそいAちゃんは下駄箱の前の仕事がはかどりません。迎えにきたS君は待ちきれなくなって隣へすわり、Aちゃんの足を靴の上のせ上から手でたたくのです。それでも入らないと今ぬいだ靴で足をたたき、その拍子に興味があたたく方へ移ってしまったらしく体から頭へとたたきはじめ

てしまいました。表現は適切ではありませんが、人を避けて放浪していたS君にしてはよい方向への変化といえそうです。

放浪癖の方もだんだん行先が近くなり、遂には教室の周りを、そして「ホラ、ホラ」と戸の方を指して私に合図して出て行き、今ではそれもめつたにしくなりました。

積木を一人でトントン組合わせているS君の姿に、ぐっと落ちつきが増してきたように思えるこのごろです。

五

この一年をふり返って思いつくまま書いてまいりました。

学級、子どもたちの指導につきましては、まだ一年ではやっと落ちつき、これからという時期で何か物足りない感じがいたしました。

最も印象に残っておりますのは四月子どもたちと初対面の時のことです。何を話しかけても言葉として返ってくるものがないのにさびしい思いがいたしました。それからしばらく言葉のない不便さに悩み、今は言葉のむなしさを感じております。言葉以上に大切なものを教えてくれた子どもたちに感謝するとともに、これからもこの子どもたちとお付合いを大切にしたいと思っております。

(大阪府立八尾養護学校)